

那須塩原市議会 「那須青山会」 行政視察報告書



視察期間：平成30年8月7日（火）～8月9日（木）

- I 視察日：8月7日（火）
視察地：北海道札幌市
内 容：「資生館小学校」について

- II 視察日：8月8日（水）
視察地：北海道小樽市
内 容：「市立小樽図書館」について
「第二次小樽市観光基本計画」について
「議会活性化取り組み」について

- III 視察日：8月9日（木）
視察地：北海道石狩市
内 容：「道の駅石狩あいろーど厚田」について

参加議員： 平山 武

北海道札幌市

・資生館小学校について

視察地 資生館小学校

視察日 平成 30 年 8 月 7 日

この資生館小学校は、街の中心部に設置されており、近年ドーナツ化現象により都市部 4 小学校の児童数減少に伴い学校統合による適正規模化が図られ、資生館小学校を含めた 4 つの複合施設が誕生した。コンセプトとして、「相互交流」・「開放」・「環境」・「安全」が挙げられ、自然な交流が生まれるよう 1 階部分には広い空間、天然芝のグラウンドがあり、地域に開かれた施設ということで大きな窓ガラスを使用しています。また、体育館は地下にあり、上部（歩道）から見えるようになっております。また体育館開放事業も行われております。学校を「地域スポーツの拠点」にとの考えを持っております。この地区（中央区の出生率は 0.821 人）は繁華街に即しており環境に関しては日照問題への対応や圧迫感の解消の関係でセットバック方式を取り入れており安全対策として、常時警備員を 2 名配置し監視カメラを設置してあります。入退館時 I D カードを利用しています。運営は、小学校に関しては、札幌市教育委員会、ミニ児童館は、財）札幌市青少年女性活動協会が管理運営主体となっており、繁華街に近いという立地から、子供が安心して遊べる場所として強く望まれる施設であり、多くの子供たちが当日も利用されていきました。指導員さんに話を伺ったところ、もう少し広い面積が必要であるとのことでした。保育園に関しては、社会福祉法人救世軍社会事業団が管理運営しており、指定管理制度で 5 年毎とのこと。特徴としては、夜間保育を実施している点であり、札幌市内には 3 ヶ所あるうちの 1 つであるとのこと。繁華街が近いと行くことで利用ニーズが多いとのことでした。小学校区の保育利用者 3 割、学区外が 7 割とのことでした。子育て支援センターに関しては札幌市子ども未来局子育て支援部が管理運営主体となり休刊日は、年末年始のみ。フル回転とのことでした。利用者数もかなり多く、平成 29 年度来館者実績は 44,690 名とのことでした。都心部であるため周りの方とのおつきあいが少なく、ここに来れば、いろいろな方と同じ悩みを相談したり気持ちが晴れるとのことでした。小学校について統廃合するにあたり、70 回以上説明会を行い、丁寧に統合に向けて進めていったとのこと。廃校になった学校の跡地については、公文書等の書庫、まちづくりセンター、市立の高等学校になっているとのこと。子供たちの通学手段としては、スクールバス対応で利用児童は 50 % とのこと。建設費に関しては総工費約 40 億円で補助金が約 10 億円とのことである。資生館小学校（施設）の取り組みとして保・小連携を積極的に行っておりまた、次世代交流事業も積極的に行っていることも特徴の一つと言える。那須塩原市においても、今後小学校の統廃合が進められていくと思われるが、廃校になった跡地利用も、しっかりと考えていかねばならない。難しいのは、過疎地の学校が、廃校になっていくので再利用が進まないかと思うが、そのままにしておくわけにはいかないなので、積極的に取り組んでいくべきである



北海道小樽市

・市立小樽図書館について

視察地 小樽図書館

視察日 平成 30 年 8 月 8 日

館長の鈴木浩一氏を訪問。小樽市は商港として栄えた頃の建築物が沢山残っております。この図書館も古い建物です。又、海岸に沿った市で細く長い地形となり山側にも住宅地が造られたので、坂が多く小樽駅から小樽湾に向かって下っています。横に長く、図書館へ遠地の人が来館するのは、小中学生も含め少なく、このため、図書館から動く、移動図書館バスを市内35か所の巡回ステーションを設置している。月2回巡回している学校には国語の時間に移動図書館バスの利用をしており、小中30校あるが子供の足では来館できないし先生に負担をかけないため、図書支援員を1名つけ、学校の図書館で読んでもらっている本の返却は、市内に5か所設置している。北海道内では、市直営の図書館が多く、これは指定管理者を使う目的とは違うためです。集客と文化を明確に意識する必要があります。市内中心部には新しく芸術村が造られた。ここをハードとすれば図書館にはソフトの部分をカバーします。このため小樽市の郷土史を集めて収納、管理、保存しています。空き家の中にも貴重な資料が見つかることがあります。市立病院、保健所から資料をいただき、健康コーナーを新しく作り、提供先との情報を一律化しています。恵庭市の育児のまちについてや幕別町図書館内の禁止しますの張り紙をしないことや、韓国の教育委員会が3回来ていること。黒松町のト仲間づくり。郷土資料を充実させたい。図書館は社会教育の中で一番入りやすい場所ですと、図書館について、全道の状況を把握されている。前職は道立図書館で就労されていたとのこと。図書館のイメージを広くするために、毎月、映画の上映、市民コンサートも始めましたと、ハード、ソフトが育てる熱いものを感じました。



北海道小樽市

・第二次小樽市観光基本計画について

視察地 北海道小樽市

視察日 平成 30 年 8 月 8 日

小樽市は那須塩原市と同規模の人口 11 万 7000 人の日本海側に位置する観光都市である。小樽市の平成 29 年度の観光客入り込み数は 806 万人、宿泊客数 76 万人と国内有数の観光都市であります。小樽市の観光の説明に当たりましては小樽の沿革を説明してからという事で小樽の沿革と概要から説明を受けた。

小樽はニシンを求める人々が定着する様になり漁業と後に石炭の搬出を目的とする鉄道が敷かれ、江戸～明治期に北前舟の航路の拠点として発展したまちで、明治後期には樺太航路・欧米航路・港は船で埋まり都市銀行が次々進出し物流・金融の拠点「北のウォール街」となり北海道の海の玄関としての役割を担うまちだった。しかし戦後運送手段は陸送に、エネルギーは石油に輸出入・移出入の港湾の荷役も太平洋側（苫小牧・釧路）に移り政治経済は札幌が中枢となり、小樽の金融機関や企業が次々撤退をしていき斜陽時代へ入った。昭和 40 年代に入り札幌自動車道・新日本海フェリー等のインフラ整備が進む中、深刻化していた市内交通渋滞緩和対策として海運機能を終えた小樽運河を埋め立て道路を建設する計画があがり、その是非を巡るいわゆる「運河論争」が起こり全国に知れわたるようになった。昭和 61 年現在の小樽運河の姿になり以降明治～昭和初期の面影を街並みに色濃く残し情緒あふれる雰囲気を持つまちとして小樽市の観光が基幹の産業の一つとなったまちです。

そこで小樽市では持続可能な観光都市として発展していくためにホスピタルティの向上や時間消費型観光の推進、新たな魅力づくり等今後 10 年間の観光振興の指針となる小樽市観光基本計画「新しいふりこき宣言」を二年かけて平成 18 年に策定し平成 28 年度に完了した。第一次観光基本計画を顧みて結果として

「観光客の満足度を高める」という目標では冬期において満足度は増加しているが全体的には減少している。

「宿泊滞在型観光への移行を進める」では宿泊者数も増加した。

「観光の経済波及効果を高める」では年間観光総消費額が増加していることから一定程度前進していると判断できた。

また目指すべき姿と主要施策については小樽観光大学校設立や小樽ふれあい観光大使制度の創設など一定の目標達成がみられた。ほとんどの施策において基本理念の実現にむけ今後も継続して施策を推進していく必要があるものと判断し小樽を観光都市として持続的な発展を続けるために、また観光が市にとって重要な産業であることを市民が共通認識として持ち、観光まちづくりの新たな 10 年を見据え一年かけて第二次小樽市観光基本計画を策定し「ホンモノの小樽とふれあう」として小樽独自の歴史や文化に裏打ちされた奥深さこそがホンモノの小樽であるということを柱にすえ小樽が有する多彩な観光資源を掘り起こし新たな魅力として磨きあげる。

小樽観光の目指すべき姿を具現化するため以下の主要施策を策定した。

1) 小樽の魅力を深める取組み

- ・キャンペーン等各種情報発信の強化
- ・小樽の四季の魅力発信
- ・歴史・文化・芸術の体験プログラムの構築
- ・小樽に点在する観光資源のニーズを捉えた磨き上げと発掘
- ・観光客が快適に過ごせる環境整備
- ・日本遺産認定にむけた活動の推進
- ・滞在型観光に向けたプランの充実
- ・ロケ地誘致活動の推進
- ・小樽の山の知られざる魅力の発信
- ・水辺を活かした誘客活動の実施

2) 小樽の魅力を広げる取組み

- ・地域DMO構築を視野にいたったアプローチ
- ・広域的観光圏の形成

3) 小樽の魅力を共有する取組み

- ・外国人観光客との総合理解
- ・観光への意識を高める活動の推進
- ・教育カリキュラム編成にむけた提案
- ・市民が観光客と触れ合う機会の提供

さらに計画推進の主体と役割について

- ・市民の役割
- ・観光業者の役割
- ・観光関連団体の役割
- ・経済界の役割
- ・行政の役割

と主体と役割を明確に示している。

以上が第二次小樽市観光基本計画の概要です。これらの施策により小樽市は運河を中心とした観光であります、年間 800 万の入込人数で年々増加をしております。また中国人をはじめ外国人の来客数いわゆるインバウンド事業も順調に推移しています。市民と観光業者の努力が感じられた視察でした。



北海道小樽市

・議会活性化の取り組みについて

視察地 北海道小樽市

視察日 平成 30 年 8 月 8 日

小樽市議会では、議会の活性化に向けて、平成 10 年に議会活性化研究会を設立し「おたる市議会だより」の発行や議会運営の見直しを行ってきた。

平成 19 年 8 月 10 日開催の会派代表者会議で、小樽市議会活性化検討会議(第 1 次)が設置され、「開かれた議会」に関するもの 10 項目(主に議会報告会・意見交換会の開催、夜間議会の開催、インターネットによる議会中継などが試行的に実施された)、「審議の充実」に関するもの 9 項目(平成 20 年から陳情提出者による趣旨説明が可能)、その他に関するもの 2 項目について検討しています。

平成 23 年 6 月 9 日には小樽市議会活性化検討会議(第 2 次)が設置され第 1 次の 21 検討項目の再検討と追加 9 項目の合計 30 項目について、7 月 25 日の第 1 回から現在まで 22 回の会議を開催し、議論を重ねてきております。

◎議会報告会・懇談会の開催について

発足当初は「議会報告・意見交換会」として、平成 20 年～22 年の 3 年間に 4 回(小樽商工会議所・小樽市 P T A 連合会・小樽市総連合町会・小樽建設事業協会他 2 団体)それぞれにテーマを決めて実施され参加者は各回 15～20 名であった。その後議会報告会の開催について、活性化検討会議において協議したが細目について会派の意見が一致せず、別途に小樽市議会公報・公聴委員会を設置して検討の結果、一般市民を対象として「小樽市議会 市民と語る会」(年 2 回・各回 2 か所)として、第 1 回を平成 25 年にスタートし現在まで 10 回開催している。参加者は当初 50 名、3～6 回は 25 名、7～10 回は 15 名と減少傾向にあり、現在、開催方法を検討中である。

小樽市議会「市民と語る会」実施要項

○開催地区 市内を東部地区、西部地区の 2 地区に分ける

○開催時期 ア 5 月中旬～下旬(東部地区 1 回、西部地区 1 回)

イ 11 月中旬～下旬(東部地区 1 回、西部地区 1 回)

○開催時間 午後 6 時 30 分～8 時 00 分

○会場 来場者 50 名予定(収容可能な会場)

○議会報告及び質疑(30 分)

定例会で議論された市民の関心が高い問題について、開催会場の地域性 も考慮し 2 つのテーマを設定しそれぞれ 3 分報告し参加者と質疑を行う

○意見交換(1 時間)

テーマを決めずに自由に意見交換を行う

○市民への周知について

- ・記者クラブなどに報道依頼をする
- ・市ホームページ(フェイスブック等)や議会だよりに掲載する

- ・開催地区周辺の町会や団体に開催案内を送付する

○今後の検討課題について

開催内容について、開催状況やアンケートにより見直しを検討

◎本会議・委員会の開催を午前からにすべきとの提起あり(現在午後開会)

(結果)会派に持ち帰り調整の結果、試行期間を設けたが、午後開会で現在に至っている。

◎議員の態度を明確に示すため記名投票が提起された

(結果)会派制をとっているので基本的に会派所属議員の態度が分かれることはない。

記名投票とする場合に、会派内の議員間で態度が分かれることが想定され、会派の意義が問われかねずこれまでどおり無記名投票とした。

(総 評)今回の視察研修でたくさん学ばせていただきました。まず開かれた議会を目指しいかに市民のより身近な議会に改革すべきかとの決意が強く感じ取れました。驚いたのは議会の開会が午後からということ、夜間議会(市民により身近な課題の時)を開催していること、会派は議員が3人以上所属していること、会派と無所属との質問時間に差があること等、わが市で実施していないことが見受けられました。今回の視察で本市の議会活性化がかなり先行していることを感じ取れました。しかしながら本議会も改革すべきことはまだまだあります。常に真摯な気持ちを忘れずに更なる活性化に取り組んでいくべきと考えを新たにしています。

北海道石狩市

・道の駅石狩あいロード厚田について

視察地 北海道石狩市

視察日 平成30年8月9日

石狩市企画経済部商工労働観光課課長、中西章司氏及び、商工労働労働課地域振興担当課長主査、佐藤政喜氏より説明を受ける。南北に67kmと長い石狩市の中心に道の駅あいロード厚田が位置する。これは、平成17年に石狩市、厚田町、浜益町の一市二町の合併による為である。昭和40年頃により石狩市に隣接する札幌市の人口が増え、これに伴い札幌市への通勤地となり、戸建と人口の増加が増えたが石狩市は、主力産業の海産物ニシンの水揚げが減り合併となった。道の駅は、地図上では中心地になるが、人口減が進んだ厚田町、浜益町の過疎地対策と地場産業をどうするかのため、地域の核となる施設の建設が必要となり、平成25年地域の核案としてまとめられた。建設地は旧公園地は利用測量、造成、資料館を撤去し以下のような整備をすすめ（道の駅 石狩「あいロード厚田」整備概要 名称 道の駅石狩「あいロード厚田」 所在地 石狩市厚田区厚田98番地2 敷地面積24,472㎡ 建物構造 鉄筋コンクリート造3階建て 建築面積 794㎡ 述べ床面積 1,333㎡ 駐車場 大型車4台、普通車147台、身障者3台 公衆トイレ （オストメイト対応2器、おむつ交換シート2台）>うち24時間トイレ 男性：小3器、大2器、女性：4器、身障者用1器（オストメイト対応1器、おむつ交換シート1台）総事業費 約14億円 事業期間 平成27年度～平成30年度 重点道の駅選定 平成27年1月30日 登録日 平成29年11月17日（道内120番目））入館数は、年間17.5万人としたが、札幌から1時間半のドライブコースにヒットしたこともあり、週末は5千人以上あり年間数は、50万人になるのではと推定していますと。あいロードの名称は、1. 石狩市のアルファベットの頭文字をとったこと。2. 海風をこの地方では、あいかぜと呼ぶこと。3. アイカップのみさき名から取り入れたとのこと。また厚田は、創価学会第二代会長、戸田城聖氏の生家があり移設された。生家が敷地内にある為、海外からもアツタへ来られる方が多いとのこと。石狩市100%出資、資本金800万、指定管理費年5,500万 スタッフは社長を含め7名管理費は、キャンプ場時2,000万出していたので適正であるとされた。開館直後のゴールデンウィーク中は10kmの渋滞があったこと、職員30名でサポートしました。道路反対側海岸側の厚田漁港の扱い商品と重ならないようにしている。テナントは3店、資料は月額4.5万 説明中何度か冬期間の対応を話されていた。

